原　著

発達障害児を持つ母親の時間的展望の変化

―「人生紙芝居」を用いた自伝的語りの再構成 ―

糟谷知香江[1)]・村田ひろみ[2)]・河瀬未来世[2)]・河津　巖[2)]

Change in the time perspective of a mother of a child with developmental disorders: Reconstructing autobiographical narratives through "*Kamishibai of Life*"

Chikae KASUYA・Hiromi MURATA・Mikiyo KAWASE・Iwao KAWATSU

本研究では，放課後等デイサービス事業所において，ある発達障害児の母親を対象として人生紙芝居（糟谷，2014）を実施した過程を報告した。人生紙芝居とは，人々の経験を過去から現在・未来へとつながる一つのストーリーとして視覚的に振り返る技法である。人生紙芝居実施後の母親の内省によれば，この物語を通して３つのことに気づいている。第一に，障害のある子どもの成長への気づきである。子どもと毎日接しているからこそ見えにくくなってしまう変化を再確認することができた。第二に，家族との関係への気づきである。自分の母と夫に目を向けることによって，努力をしているのは自分一人ではないという気づきが生じた。第三に，自分自身の時間的展望の深化である。彼女は幼少期から将来までの時間のなかで現在の生活を位置づけることができた。人生紙芝居は，母親が障害のある子どもと関わるための力を引き出すことに役立つと考えられる。

キーワード：発達障害，放課後等デイサービス，ナラティブ

問題と目的

近年，障害のある子どもに対する社会的支援が拡充されてきている。その一つである放課後等デイサービスは学齢期にある障害児のための通所施設で，児童福祉法に基づいて2012年に新設された制度に基づいている。放課後等デイサービス利用者数は，サービスが開始された2012年４月の51,678人から2017年３月の149,012人へと急激に増加している（厚生労働省，2016b; 2017）。「放課後等デイサービスガイドライン」（厚生労働省，2015）によれば，放課後等デイサービスは，子ども本人への支援，保護者支援，地域支援の３つから構成されている。子ども本人への支援の目的は，家庭とも学校とも異なる場において子ども一人ひとりの状況に応じた発達支援を行い，他者との間に信頼関係を形成する経験を積ませながら，子どもたちの健全な育成を図ることである。保護者に対する支援では，子育ての悩みについての相談を受ける，ペアレント・トレーニングを活用して子どもの育ちを支える力を養う，子どものケアを一時的に代行することなどが行われる。保護者がこうした支援を通じて障害のある子どもに向き合うゆとりと自信を回復すれば，結果的に子どもの発達に好ましい影響があると考えられる。地域支援では，障害のある子どもたちが他の子どもも含めた集団の中で育つことができるよう，放課後児童クラブや児童館等と連携しながら地域社会における障害児支援の専門機関としての役割を担うことが期待されている。

厚生労働省（2016a）によれば，放課後等デイサービスを利用する子どもの障害種類別の割合は，発達障害が53.5%，知的障害28.1%，肢体不自由6.1%であり，過半数を占める発達障害のある子どもへの支援がとりわけ重要となっている。発達障害のある子どもを持つ保護者が経験する困難としては，子どもの行動傾向（言葉の遅れ，多動，友達

1) 九州ルーテル学院大学　人文学部心理臨床学科
Email：kasuya@klc.ac.jp
2) NPO 法人こどもサポート・にじいろ

と遊べない，など）に違和感や育てにくさを感じながら対処方法で悩む，子どもの行動傾向を自分の育て方のせいであるととらえる，子どもの行動傾向を障害であると周囲の人々に理解してもらえない，子どもの将来に対する不安を抱く，などがある（通山，2011; 渡邉・東條，2014）。保護者に対して，子どもの行動を理解して対処するための適切な情報を提供することと同時に，精神的・情緒的な安定を図ることが重要であると考えられる。

発達障害のある子どもの親については，これまでにストレスおよび障害受容の観点から多くの心理学的研究が行われてきている。これらは，発達障害にまつわる葛藤など親が抱える問題を明らかにして有効な支援へと結びつけることを目的としている。しかし近年は，親の心理的適応や困難性への支援，生活の質を向上させることを目的とした研究も行われるようになってきている（中田，2017）。沼田（2016）は，発達障害のある子どもの母親が子どもや夫との関わりのなかでどのように生きているか，日常生活での経験の語りを分析している。その結果，障害のある子との関係および夫との関係という二つの二者関係の間で母親が調整を行い家族をつなげていることを明らかにした。子どもの障害にまつわる葛藤を生活の一部に組み込みながらも日常を送る母親の姿は，支援実践の場における母親の実態に近いものであると考えられる。子どもの障害に関連して親は，葛藤などネガティブな感情だけでなくポジティブな感情も経験する。たとえば，障害のある子どもの成長を再確認したときや子どもが親に対して愛着を示したときなどに嬉しさを感じること（橋本･一門，2017），障害のある子どもを持つことによる親自身の人間的成長などの変化（山根，2014）が報告されている。つまり，子どもの障害に関わる葛藤は親の生活の一側面であり，より広い視点に立って包括的にとらえれば異なる姿が浮かび上がってくるといえる。

放課後等デイサービスを利用する親を対象とした土路生・竹中・田中（2008）による調査では，子どもの行動の理由や子育ての仕方，周りの人々との関わり方などの情報提供は積極的に行われやすい一方で，親の心理的支援は行われにくいと指摘されている。また厚生労働省（2017）は，放課後等デイサービスの利用者が上述のように急速に増加している一方で，事業所によって療育内容の差が大きいことを踏まえ，支援内容の適正化と質の向上を今後の課題として挙げている。親が必要としている心理的支援を行うためには，障害にまつわる葛藤と同時に，親の経験するポジティブな感情を理解したり障害のある子ども以外の家族との関わりを理解することが役立つだろう。このように親に対する広い視点を持つことは支援実践に関わる人々にとって重要であると考えられる。

人の生活を包括的にとらえる方法の一つに「人生紙芝居」（糟谷，2014）がある。これは人々の経験を過去から現在，そして未来へとつながる一つのストーリーとして視覚的に振り返る技法である。形態としては手作り紙芝居で，作品は語り手と聴き手の共同作業を通して制作される。人生紙芝居の利点は，この共同作業で作り上げるというところから生じる。語られた長い生活史を紙芝居の短い脚本にどう収めるか，脚本を表現する図版をどう描くか，語り手と聴き手が話し合いながら決定する。このプロセスにおいて語り手のストーリーが共有されるのである。完成作品は語り手にとって「人生のあらすじ」に相当する簡潔な脚本となるが，簡潔であるが故に出来事と出来事の間にこれまで意識していなかった因果関係が見えてくることもある。また，完成した人生紙芝居を語り手とその近親者の前で上演することによって，語り手のストーリーがより多くの人に共有されるのである。このような人生紙芝居の特徴は，発達障害のある子どもを持つ親に対する広い視点を持つことに役立ち，よりよい支援実践を下支えするのではないかと考えた。本研究は，放課後等デイサービスにおいて発達障害のある子どもを育てる母親に人生紙芝居を実施し，この技法の有用性と実施上の留意点を検討する。

セッションの経過

【事例の概要】本論では，ある発達障害児の母親Aへの実践事例を取り上げ，考察する。調査協力者は九州地方在住の30代女性１名である。家族構成は，夫，長男（小学校高学年）と長女（小学校低学年）。彼女は首都圏で生まれ育って結婚，そして第一子（長男）誕生後に夫の実家のある九

州のＢ県へ家族で転居した。生活環境の大きな変化に適応するための苦労と同時に，長男の発達が定型的ではないことが次第に明らかになっていった。そして201X 年10月，長男を放課後デイサービスのＣ事業所に通わせるようになった。201X ＋１年に，これまでのＡの経験について気持ちを整理するために「人生紙芝居」を実施した。倫理的配慮として，Ａに対しては事前に，この介入の趣旨，個人情報の取り扱い，参加中止の自由について文書と口頭で説明した。さらに，参加を中止してもそれによって事業所で受けるサービスへの影響はないこと，話したくないことを無理に話す必要はないことも補足説明し，同意書への署名によって承諾を得た。紙芝居の制作および完成作品の上演会については，Ａの意向を確認しながら方法を決定した。なお本論においては，個人が特定されないよう紙芝居の脚本の一部に変更を加えている。

【セッションの概要】201X ＋１年３～５月に４回のセッションをＣ事業所内で行った。時間は15～100分，平均63分であった。面接は第１著者が中心となって進め，他の３人の著者たちも同席して適宜会話に入った。面接内容はノートに記録した。

【経過】

セッション１

結婚から現在までを中心としてＡの生活史を聞き取った。その後，紙芝居の図版に何を描くかＡと話し合いながら決めた。図版は９枚であった。

セッション終了後，第１著者が脚本の原案を作成し，他の著者たちに提示した。また，第３著者（河瀬）が第２著者（村田）と協議しながら図版の下書きを作成した。この際，Ａが子どもの迎えでＣ事業所を訪れたときに図版を提示して意見を取り入れるようにした。

セッション２

幼児期から結婚までのＡの生活史を聞き取った。また，結婚後については，脚本と図版の下書きを確認した。この際には新たなエピソードがＡから語られた。その後，新たに語られた生活史を紙芝居にどう取り込むか検討した。また，図版の内容についても検討し，結婚までの図版６枚，現在の家族の様子に関する図版１枚を追加することを決めた。セッションは，Ａを含めた全員で協力しながら紙芝居を作成するという雰囲気で進められた。なお，長男の発達障害を妖怪として描くこととなった。これは，長男が妖怪の登場するゲームを好んでするという理由であった。

セッション終了後は前回同様に第１著者が脚本の修正を行うとともに，第３著者（河瀬）が図版を作成した。また，Ａに内容についての意見を求めた。

セッション３

脚本および図版の色について，Ａの意見を取り入れながら決定した。また，紙芝居の「お披露目会」（上演会）をＣ事業所において実施することを決定した。紙芝居の上演を誰が行うか話し合った結果，Ａ自身が担当することとなった。

セッション終了後，紙芝居を完成させた（表１）。その後，Ａは自宅で紙芝居上演の練習を行った。Ａの子どもたちも練習の様子を眺めていた，とのことであった。

セッション４

Ａの長男・長女を含めた事業所を利用する子どもたち６名，スタッフ５名の前で人生紙芝居の上演会を実施した。Ａが朗読し，スタッフの１名が補助をした。上演会の間，Ａの長男はＡの後方を歩き回りながら話を聞いている様子であった。もう１名，ADHD の診断を受けている子どもが室内を歩き回っていた。残り４名の子どもは集中して話を聞いていた。子どもたちは普段のデイサービス利用時に比べ，話に集中する傾向がみられた。Ａの長男も，普段であれば部屋から出て行ってしまう場面であったが，上演会の間は紙芝居を見聞きできる室内にとどまっていたことから，紙芝居に関心を持っていたと考えられる。

上演会終了時にＡへ２項目からなる自由記述式質問紙を渡し，Ａから人生紙芝居に関するセッションの感想を得た。

【セッション終了後の内省】

この介入に関するＡの内省を表２に示す。ここでは，人生紙芝居の制作を通して自分自身の経験を振り返る機会となった，できあがった紙芝居を見て家族の歴史を振り返ることができた，自分自身の大変さばかりに意識が向かっていたが，夫が家族のためにがんばってくれていたことに気付いた，といったことが述べられている。また，デ

表１　紙芝居「A さんちの家族」の脚本

ページ	ストーリー
(1)	A さんは昭和〇年に生まれました。兄がいるふたり兄妹です。生まれ育ったのは関東の下町といわれる場所です。下町は家と家の距離，それに人と人の距離も近くてにぎやかです。A さんはご近所のおじさん・おばさんからかわいがられて育ちました。
(2)	A さんは近所の友達と，空き地で鬼ごっこやケンケンパをして遊んだりしました。子どもたち７～８人で銭湯めぐりをしたこともいい思い出です。 **A さん**：気持ちいいねー！ **友達**：楽しいね！
(3)	子どものころ A さんは，毎日，100円をもらって駄菓子屋へ行っていました。100円でラムネやヨーグルトなど，たくさんのお菓子を買うのが楽しみでした。 **A さん**：これ，ください！ **駄菓子屋のおばさん**：A ちゃん，ヨーグルト好きよね。はい，どうぞ。
(4)	A さんの家では，友達の家と少し違うことがありました。それは，家族と話をするときは手話と筆談を使うことです。A さんのお母さんは「触手話」という特別な手話を使うことができました。触手話を使って，見ること・聞くこと両方ができない人を希望の場所へ連れて行く仕事をしていました。 **A さん**：私もお母さんみたいになりたいなー。 **A の母**：きっとなれるよ。がんばってね，A ちゃん。 お母さんは，「人のためになる仕事をしなさい」と，よく A さんに話していました。
(5)	学校を卒業すると，A さんは一人暮らしを始めました。そして，パン屋さんで働き始めました。朝６時から夜10時まで仕事という日もあって，とても忙しい職場でした。でも，充実した楽しい毎日でした。
(6)	あるとき，職場の交流会で D さんという男性と出会いました。D さんは，一目会ったときから特別な感じがする人でした。まもなく二人はつきあい始めました。
(7)	平成△年，A さんと D さんは結婚しました。
(8)	結婚の翌年に長男 E くん，その２年後に長女 F ちゃんが生まれました。二人が生まれて A さんはとても幸せでした。
(9)	長女が生まれる少し前のことです。九州に住む夫の両親が事故で大けがをしてしまいました。心配した夫は両親の側にいたいと A さんに相談しました。そうして，一家は関東から九州の B 県へ引っ越すことになりました。A さんにとっては生まれて初めての九州での生活です。B 県がどんなところか想像もできなくて，不安いっぱいでした。
(10)	B 県での一家の生活が始まりました。実家に帰ってきた夫は，新しい仕事に就き，家族のために一生懸命働きました。A さんも家族のためにがんばりました。A さんには B 県のいろいろなことが新鮮でした。言葉も習慣も関東と少し違います。最初のうちは戸惑うこともありました。特に大変だったのはお買い物です。長男と長女をつれてお店まで歩いて行って，買い物をして，大きな荷物を抱えて家まで戻るのです。周りのママたちはみんな車で買い物に行っています。「私も車が運転できたらな」と A さんは思いました。
(11)	B 県に引っ越してきて半年ほどすぎたとき，近所の保育園に長男と長女が入園できることになりました。二人は保育園がとても気に入り，たくさんお友達もできました。長男はお友達から B 県の言葉を覚えました。あるとき遊んでいた長男と長女が言い合いをしました。 **長女**：入れてよー！ **長男**：かたらせん！（＝入れてあげない） **長女**：えーーー！ これを聞いた A さんは，方言の「かたらせん」を E くんが発明した言葉だと思って，最初びっくりしました。でも，A さんはゆっくりゆっくり B 県の言葉を覚えはじめています。
(12)	子どもたちが保育園に行っている間に A さんは車の免許をとりました。そして，関東から持ってきた車が A さんのものになりました。A さんは，車の後部座席に長男と長女のための２つのチャイルドシートをつけました。免許を取る前は徒歩で往復２時間もかかっていたお買い物が，車なら10分です。それに，雨が降っていても大丈夫です。家族で夕食に出かけるときは，帰りは A さんが運転することもあります。B 県で生活していくために必要だった運転免許ですが，最近は運転を楽しく感じるようになってきました。B 県の生活の楽しさも見えてきました。
(13)	平成●年４月，長男が小学校に入学しました。長男が学校から宿題を持って帰ってくると，いつもそこに妖怪がやってきました。妖怪は長男をあやつって DS で遊ばせてしまうのです。宿題をしたい長男は妖怪と話をしました。

	長男：僕，宿題をするんだよ。おい妖怪くん，どこかに行ってよ？ **妖怪**：いやだね。僕はどこにも行かないよ。 **長男**：ダメだよ，出てってよ！ **妖怪**：僕に勝ったら出てってやるよ。 **長男**：えーーー！ １年生のころは妖怪がDSをすると決めてしまう日が多かったのですが，最近は宿題をすると長男自身で決められる日が増えてきました。長男が好きな勉強は，漢字です。保育園のころから漢和辞典を読んだり粘土で漢字を作ったりしていました。小学校１年生の時には「醤油」や「鬱」という，大人でも書けないような難しい漢字を書けるようになっていました。
(14)	長男は，マラソンにも挑戦しています。保育園の時は，先生が長男と一緒に走ってくれていました。でも小学校に入って初めてのマラソン大会で，長男はひとりで完走しまた。家に帰って長男はＡさんとお話ししました。 **Ａさん**：マラソンどうだった？ **長男**：ビリだったー。でも一人で最後まで走ったよ。 **Ａさん**：よくがんばったね。 長男は３年生になってから卓球部に入り，体力がついてきました。マラソン練習では10位以内に入ることもありました。
(15)	長女は平成▲年４月に小学校へ入学しました。ディズニーのプリンセスが大好きな女の子です。長女は小学校では勉強をがんばりたいと思っています。長男も，長女と一緒に学校へ通うのが楽しみです。
(16)	Ｂ県で大きな災害があったあと，家族みんなで晩ご飯を一緒に食べられるようになりました。お父さんは家族みんなのためにご飯を作ってくれることもあります。長女もお料理をします。野菜を切ったり炒めたり，お手伝いが大好きです。
(17)	このお話の最後にＡさんの夢を紹介します。一つ目は，家の中のお掃除をがんばることです。二つ目は，長男と長女が関東のおじいちゃん・おばあちゃんとときどき会えるようにしてあげることです。そして三つ目は，子どもたちが大きくなったら，また家の外で仕事をすることです。３つの夢が叶うといいですね！

表２　セッションに関するＡの内省

１．気に入ったページはどれですか？
・夫との出会いのところ ・家族みんなでご飯を食べているところ ・将来の夢を思い描いているところ
２．紙芝居を見て，どんなことを感じましたか？
前日に，夫にも初めてきいてもらいましたが，出会いのシーンは恥ずかしかったし，夫も赤くなっていました。家族の歴史でもあるので，夫も色々振り返ったり，思うところはあったと思います。私自身，下町で大事に育てられたんだなぁと思いました。母が東北出身で上京し，私たちを育て，母も同様に大変だったのだろう等，色々思いました。また夫も，Ｂ県へ来て，家族のために仕事をがんばってくれてたんだなぁと改めて思い直しました。子どもも学校のことでがんばっているし，私も将来のこと，家族のことを考え，がんばりたいです。

イサービス事業所スタッフからは，Ａが働きたいと思っていることを初めて知った，という気づきがあった。

考　　察

本研究では，発達障害のある子どもの母親Ａが困難と喜び，すなわちネガティブ・ポジティブ両方の感情を経験しながら家族と関わって生活している姿を，紙芝居という視覚的手段を用いて提示した。紙芝居制作にはデイサービス事業所スタッフが関わり，さらに完成作品の上演会にはＡの家族が関わって，Ａのライフストーリーを事業所スタッフと家族の皆で共有した。

人生紙芝居実施後のＡの内省によれば，この物語の制作過程と上演会を通して３つの気づきがあった。第一に，障害のある子どもの成長への気づきである。子どもの行動傾向が少しずつ変化してきており，それを成長ととらえられることを再確認した。子どもと毎日接しているからこそ見えにくくなってしまう変化を改めて俯瞰し，Ａは子どもの成長に目を向けることができた。成長への気づきは，子どもの特性を少しずつ受け入れ，

子どもに対して前向きな思いを持つことにつながると期待される。

第二に，家族との関係への気づきである。Aは，自分の母親も子育てでは苦労をしたであろうこと，自分と夫が出会ったときのこと，さらに夫が家族のためにがんばって働いてくれていたことを改めて確認した。周囲の人々に目を向けることによって，努力をしているのは自分一人ではないという気づきが生じている。

第三に，自分自身の時間的展望の深化である。Aは幼少期から将来までの時間のなかで現在の生活を位置づけることができた。過去については，子どものころ地域の人たちに見守られて育ったことが再確認された。未来については，いまの子育てが落ち着いたらどこかで働きたいという希望が語られた。Aは，幼少期から現在，そして将来への展望を含めた時間のなかで，家族を中心とした様々な人々と関わりあいながら，障害のある子どもとも関わっていることが示されたといえる。

以上から示唆される人生紙芝居の有用性をまとめたい。人生紙芝居は，ライフストーリーの聞き取りに始まり，脚本と図版の制作（および，話し合いによる内容協議），上演会，全体の振り返りという過程を経るので，この全体を通しての効果について述べる。第一に，語り手である母親にとっての有用性である。上述のように母親の視野を時間の点でも人間関係の点でも拡大し，障害のある子どもとの関わりを自らの人生の流れの中に位置づけることを指摘できる。第二に，母親と支援者との間の信頼関係を深める効果である。人生紙芝居の制作は，母親が自らの経験の意味づけを支援者とともに確認していく作業となる。自分のことを理解してくれているという思いが母親のなかで形成されれば，支援者との信頼関係を深めることになるだろう。第三に，支援者にとっての有用性である。紙芝居制作を通して支援者は，語り手について，通常の関係（スタッフ－保護者）では知り得ないことにまで触れる機会を持つことになる。母親のこれまでの人生の歩みを知っていれば，支援者は母親とより適切な関わり方をすることができると考えられる。これらのことは，母親自身が障害のある子どもと関わるための力を引き出すことにつながるのではないだろうか。

次に，人生紙芝居を実施するにあたって留意すべき点を述べる。まず実施時期であるが，本研究で取り上げたAの人生で最も難しい時期は，九州地方への転居から子どもの発達障害が明らかになって対応を迫られ始めた頃であったと推測される。この時期を過ぎてから人生紙芝居を実施したため，人生の中のポジティブな変化を物語に取り入れることができたと考えられる。もし困難のまっただ中にあるときであれば物語の構成の仕方には慎重を期さなければならない。他の留意点としては，子どもの発達障害をどのように描くかについても配慮が必要である。今回は，Aの長男が妖怪の登場するゲームを好むことから，障害を妖怪として登場させた。語り手の意向を確認してこのように決定したが，そもそも母親が障害をどのようなものとしてとらえているのか明確にしておくことも重要である。なぜなら，母親は人生紙芝居での障害観を土台に，その後も障害に向き合っていくことになると考えられるからである。また，人生紙芝居における障害の描かれ方は，紙芝居を見る人々に対して一つの障害の語り方を示すことになるからでもある。

本研究ではある母親の人生の物語が紙芝居を通して視覚的に提示され，彼女と関わりの深い人々に共有される過程を描いた。物語という考え方は，ナラティブ・セラピーのように特定の心理療法を生み出しているだけでなく，心理療法全般にも共通していると野村（2016）は指摘している。心理療法というものにおいてセラピストは，クライエントの語りに応答しながら，クライエントの語りのある部分に重みづけを与えたり，ある部分を特定の方向へ意味づけたりしながら，クライエント自身が納得できる筋道の物語を生成している（河合，2003）。これをセラピストは様々な心理療法の理論に基づいて行っている。一例を挙げれば春日（2015）は，東日本大震災の津波により友人や街を喪失した大学生を対象にアート・フォーカシングを用いたカウンセリングを実施している。そこでは，トラウマを承認しつつ生の意味を再生成するといった認知の変容が報告されている。このように対話によって物語が生成されるのは心理療法の場に限定されない。たとえば，難病や依存症などの当事者のピア・サポートの場においても対

話を通して物語が生成され，彼らが問題に対処する力を得ている様が描かれている（伊藤，2013）。以上のように，自己に関する納得できる筋道の物語は当事者の問題対処能力を高めると考えられる。人生紙芝居は，当事者が納得できる短い物語を視覚的に提示する技法であるといえる。さらに，一つの物語を紙芝居という目に見える形で制作すること自体を主たる目的としている点もこの技法の特徴である。カウンセリングを求めている訳ではない者を対象とした心理的支援としては，目的が紙芝居制作であれば参加への抵抗感が小さいうえ，完成作品を贈呈されることで当事者が一定の達成感も得やすいと思われる。

本研究の実践は一事例を対象としたものであり，結果を一般化するためには今後さらなる実践が必要ではある。しかし，発達障害のある子どもの母親が主体的に子どもと関わる力を得るための心理的支援となりうる可能性を示したことには一定の意義があると考えられる。今後の課題としては，障害というものをどのように描き得るのか検討が必要と思われる。今回の実践では障害を妖怪として描いたが，これはイラスト故の表現の自由さを活用したものであった。上述のように人生紙芝居における障害の描かれ方は母親およびその周囲の人々の障害の受け止め方に影響を与えると考えられる。障害をどう描くことができるのか，母親と支援者が十分な意見交換を踏まえて進めるだけでなく，より多くの人々を対象とした調査を通しても検討する必要があるだろう。

謝　辞

本研究の実施にあたりご協力くださったＡさんとご家族の皆様に感謝いたします。

引用文献

橋本浩美・一門惠子（2017）．自閉症スペクトラム障害の子どもをもつ母親の育児におけるポジティブ感情：「嬉しい実のなる木」の制作を通して　応用障害心理学研究，15･16合併号，11-25.

伊藤智樹（編）（2013）．ピア・サポートの社会学　晃洋書房

春日菜穂美（2015）．アート表現を用いた震災トラウマ・カウンセリング：ナラティブ技法としてのアート・フォーカシングの意義　心理臨床学研究，33（4），390-400.

糟谷知香江（2014）．ナラティブ・アプローチによる経験の振り返り：「人生紙芝居」を用いた試行的実践　応用障害心理学研究，13，37-46.

河合隼雄（2003）. 物語と人間（河合隼雄著作集第Ⅱ期第７巻）岩波書店

厚生労働省　（2016a）．平成27年度障害福祉サービス等報酬改定検証調査　6-2障害児支援の支援内容及び質の評価に関する実態調査〔放課後等デイサービス〕<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000127814.pdf>（2017年９月10日）

厚生労働省（2016b）．障害福祉サービス，障害児給付費等の利用状況について（平成24年４月～）<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/24-4_28-3.pdf>（2017年９月10日）

厚生労働省（2017）．障害福祉サービス，障害児給付費等の利用状況について（平成28年４月～）<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/2905-1.pdf>（2017年９月10日）

中田洋二郎（2017）．発達障害における親の「障害受容」：レビュー論文の概観　立正大学心理学研究年報（8），15-30.

野村晴夫（2016）．クライエント・ナラティヴと心理療法の多元性　大阪大学大学院人間科学研究科紀要，42，255-272.

沼田あや子（2016）．発達障害児の母親の語りのなかに見る家族をつなぐ実践：「葛藤の物語」から「しなやかな実践の物語」へ　質的心理学研究，15，142-158.

土路生明美・竹中和子・田中義人（2008）．発達に遅れがある子どもの母親の子育て：障害児デイサービス利用後の変化と支援に焦点をあてて　人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌，8（1），157-166.

通山久仁子（2011）．発達障害のある子どもをもつ親をめぐる動向：その論点の整理のために　西南女学院大学紀要，15，55-65.

山根隆宏（2014）．自閉症スペクトラム障害児・者の親は障害をどう意味づけているか：Benefit Finding と Sense Making からみた予備的検討　奈良女子大学心理臨床研究，１，49-56.

渡邊喜久枝・東條吉邦（2014）．発達障害児をもつ母親の不安感の検討　茨城大学教育学部紀要（教育総合，増刊号），245-263.

（受稿：11月７日，受理：１月26日）

Change in the time perspective of a mother of a child with developmental disorders: Reconstructing autobiographical narratives through "*Kamishibai of Life*"

Chikae KASUYA・Hiromi MURATA・Mikiyo KAWASE・Iwao KAWATSU

The present study reports the results of applying "*Kamishibai of Life*" (Kasuya, 2014) for a mother who has a child with developmental disorders. *Kamishibai of Life* is a technique to recollect visually one's own experiences as a story connecting the past and the future. We conducted the study at an after-school day service center. After the implementation, the participant reflected on the process and wrote impressions. Her reflection revealed three themes: (1) development of the child having developmental disorders: it is difficult to notice the development of the child because she is with him every day, so that she reconfirm the development, (2) relationships with family members: she noticed that her mother and her husband made efforts toward helping the family in the same way as she does, and (3) deepening her own time perspective: she situated the present in time like a road extending from the past to the future. The present results suggest that the *Kamishibai of Life* technique provides mothers the power to positively engage with their children.

Key words: developmental disorders, after-school day service center, narratives